

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)



文は信なり

初夏号 救いの証特集

発行責任者・事務局
三浦喜代子

JCP事務局 〒131-0043
墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-161838

HP:<http://jcp.daa.jp>

日本クリスチャン・ペンクラブ (JCP)

その歴史をたどる 本部代表 三浦喜代子

★六三年目に入ったJCP活動

今年二〇一四年は文書伝道を神様からの使命とするJCP(前史を含めて)が、活動を始めてから六二年になります。歳月の経過とともにJCPを知る多くの方々为天に帰られ、高齢化し、資料も少なくなっています。

六四年の半分にも満たない二七年を数える若輩で、生き証人には程遠い私ですが今日までの略史をたどってみたいと思います。

私が初めてJCPの強烈な刺激を受けたのは、熱海ビレッジで行われた第三十回夏期学校の時です。一九八七年、昭和六二年のことでした。以後も夏期学校は 毎年欠かさず開催され、JCP最大のイベントとして全国から多くのペン友が集まりました。その間に、五十周年、六十周年大会を東京で開催しました。通常は、東京に本部を置き、関東、中部、関西のブロック単位で独自に活動しています。

★原点は基督教文筆家協会

これは現在のJCPの前身です。戦後七年、まだまだ敗戦の深い傷跡を残す一九五二年、昭和二七年六月四日、活躍中のクリスチャン執筆家を中心にして総会がもたれ、発足しました。初代会長は村岡花子氏、これを阿部光子、満江巖、藤原一生氏が助けてました。

ここに至るまでももう一つの前史があります。一九四九年、キリスト教界やキリスト教出版界での文書伝道の拡大強化を計る目的で全国文書出版協議会が開かれ、そこからNCC文書事業部が発足、アメリカからの資金で活動が始まり、種々の出版企画をし、出版

社へ資金援助をしました。

しかし、キリスト教の出版を盛んにするには、クリスチャンの執筆家を養成し、著作活動を助けることが必要であるとの声が起こり、基督教文筆家協会が設立されました。

★日本クリスチャン・ペンクラブと改名

十年余りの時を経て、一九六三年、昭和三八年四月、会の名を日本クリスチャン・ペンクラブと改め、今後は、すでに著作活動をしている者だけでなく、文書伝道に関心のあるクリスチャンならだれでも、ともにあかし文章を学べるように門戸を大きく開きました。

これによって教会の一般信徒である会社員も主婦も入会し、しだいに輪が大きく広がって行きました。

会長名も理事長に変え、初代理事長に馬場嘉市氏が就任しました。氏は高齢のため三年で退任、そのあとを創立当初から協力した満江巖氏が二代目理事長に就任、以後、一九九九年九月、八七歳で召天されるまで二八年もの長期間、JCPに専心、全力を傾注して会を支え、文書伝道の使命を推進しました。会の運営は、会費と献金で一切を賄い、独立自主の堅実で力強い歩みを続け、現在に至っています。活動は、月一回の例会、年一回の夏期学校、年一回のあかし新書の発行、機関誌の発行でした。これらは、一九九九年十月、三代目理事長に就任された池田勇人氏時代も、基本的に踏襲されています。池田氏は二〇一三年、六三歳で惜しくも召天されました。

(創立50周年記念誌参考)

村岡花子さんと

日本クリスチャン・ペンクラブ

今年、JCP創立者村岡花子の生涯が、テレビの連続ドラマで放映され、話題を呼んでいます。しかし、村岡花子が『赤毛のアン』の翻訳者であることは有名ですが、JCPの生みの親の一人であることはほとんど知られていません。また花子が父親以来の熱心なクリスチャンであったこともあまり知られていないのはとても残念です。

花子は文学、特に翻訳作品を通して、敗戦後の萎れた同胞たちに、夢と希望を与えることを使命としました。聖書の『信仰と希望と愛』に立つ働きであったと確信します。JCPはそのスピリットを継承しているのです。

現在、JCPは、イエス・キリストの恵みを証しする【あかし文章】によって、世の人を一人でも救いに導くために、日夜、身を削って取り組んでいます。文字離れ、本離れ、少子高齢化の厳しい時代ですが、花子をはじめめとする多くの先輩たちは、大震災、思想統制、世界大戦、原爆、敗戦など、想像を絶する苦難にも負けずに神様から与えられた使命に生き抜きました。

私たちも奮い立ってあかし文章を書いていくにはありませんか。それを配布していくことではありませんか。私たちは神様から遣わされた小さな文書伝道者です。神様の期待に添うJCPでありたいと切望します。

(三浦喜代子記)

初めに音楽ありき

横山美佐 (山形在住)

中学三年生になり、いつものようにピアノと声楽のレッスンに出掛けると、先生から「山形北高の音楽科を受けて見ないか」といったお話がありました。

音大を目指す気持ちはあったものの、ずっと両親と兄が卒業した長井高校へ進むつもりでいましたから、突然のお話に驚きました。

山形北高はレベルが高いだろうなと思い、私の住む街とは学区が違うので、入れば下宿することになるなあと、不安もありました。そんな状況から葛藤が続く、私は体調を崩してしまいました。

母は、自分では助けるすべもなかったのか、教会に通っている近所の婦人と白鷹教会へ行くことを勧めました。その婦人は毎週日曜日に、私に献金をくださり、教会へ連れて行ってくれました。

教会で初めて「祈り」に触れ、目に見えないものに向かって祈る姿に感動しました。順調に教会に通っていても、どちらの高校にするかの葛藤は消えず、占いや呪いが罪であることも知らなかったもので、私と母は霊媒師に進路を占ってもらうことになりました。

長井高校が適切との霊の答えで、私は受験に合格し、長井高校に入り、水泳部に入っ



熱心に部活をして過ごしました。ところが、大会も終えた秋から体調を崩し、不登校になり、精神科に入院しました。仮面うつ病でしたが、教会だけは欠かさず出席していました。受洗の勧めがあり、あとで思い返すと何もわからないままのような気がしますが、一年経ったクリスマス札押で洗礼を受けました。

高校を中退してのち、教会では奏楽の奉仕をし、二十歳からは毎年夏、北京を訪ね、中国武術を学びました。ある時、出会ったスイス人の宣教師から「あなたが救われているかはわからない」と言われてしまいました。救いの時、聖句を与えられるという経験もなかったからです。受洗の時の悔い改めの祈りも牧師が代わりにしてくださったのです。

救いの確信が持てないというこの悩みを、心の病の専門家でもある牧師に相談したところ「人を介して信じたときにも救いは成されている」とお返事をいただきました。

それでも私は神様から直接にみことばをいただきたいと思い、祈り続けました。神様は私の求めに応じてくださり、エペソ四章五節のみことばを備えてくださいました。

『主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです』

十六歳で受洗したものの、様々な信仰の疑問を持ちましたが、この聖句で平安を与えられました。

これからも、祈りと聖書通読を大切にし、神様のみこころを求めながら、好きな音楽の道を大切にしていきたいと思えます。

救いの証し 特集

遅い歩み

駒田 隆

今、わたしの歩みは、あまり早くありません。年を重ねるごとに、足が遅くなってきました。若い方が、そばをさっそうと通り過ぎるところやましくなります。わたしにも、あんな時代があったのだな、と思い出します。わたしの信仰もまた、そんな歩みに似て、だんだんとゆっくりしたものになりました。

信仰を求め始めた若いころは、ただ、神さまとは、イエス・キリストとは、と夢中で聖書を読み、牧師に疑問を投げかけて、信仰を求めていたのです。そして、それなりに自分で納得してバプテスマを受けました。

しかし、それからが大変でした。仕事が忙しくなると、礼拝に出るのも怠りがちになって、聖書を開く時間が減りました。やがて、いくらか責任ある地位につくと、どうしても現実と信仰との矛盾が重くのしかかってきたのです。聖書に示された愛をもって実践しなければ、と思っても、目の前にある現実はいきなり消えてしまった。

わたしがやっていることは、信仰と矛盾しているのではないか。イエスは、どんな場合にも愛をもって赦されている、しかし、置かれた立場上、ここは法令に従って厳しく処理しなければならぬ、そんなことが出て来るのです。わたしは、悩みました。これでは、論語読みの論語知らずではありませんが、聖書読みの聖書知らずになってしまおう、と。

わたしの信仰は、もう一度原点に戻らざる

を得ませんでした。イエスの言われたこと、イエスが実践されたこと、イエスの求められたことは、何であつたのであろうか、と。

わたしは、思い違いをしていたのです。わたし自身が、立派な人に、良きクリスチャンになろうとしていたこと自体が、思い上がりでした。自分自身で良きクリスチャンになれるという、過剰な自信だったので。

わたしは、人に認めてもらうために、人に見せるために、信仰を求めていたのです。考えてみれば、それは大きな間違いでした。わたしは、クリスチャンであるかどうかは、わたしが決めるべきものではなかったのです。

わたし自身の日常生活が、クリスチャンにふさわしいものであるかどうかは、神さまがお決めになることでした。

わたしは、思い上っていました。わたしはただ、イエス・キリストを信じている。神さまに自分をお任せして、歩いて行けばよかったのです。しかも、わたしの十字架は、イエス・キリストが共に担ってくださるのであつて、わたし一人で背負っているのではなかったのです。わたしには、いつもそばにイエス・キリストがおられる、それなら、一人で悩んでいる必要はありません。

すべてを神さまにお任せして、歩いて行けばよかったのです。その歩みが、少し横道に外れても、どんなに遅くても、神さまは、いつまでも、わたしを待っていてくださるお方でした。

母の信仰に導かれて

荒井 文

私は昭和十四年三月、東京の板橋にある日大病院で八ヶ月の未熟児として母の命と引き換えに生まれました。二七歳のクリスチャンだった母は、私の耳元に口づけるようにして、讃美歌五一九番を歌っては祈りながら召天しました。

その後養子に出され、そのことを知らずに養父母には可愛がられました。

しかし養父、その後養母が亡くなり、全くの一人になり、養母の従姉妹の家に身を寄せることになりました。



東京の池袋にある花柳界の養母の従姉妹である（おば）の家に身を寄せた私は、横浜の学校まで電車通学をしました。ミッシヨンスクールだったので、とても良い先生方でした。朝三時に

起きて家族のために、おじと一緒に朝食の準備、自分の弁当を作り、店の掃除をして（おばはこの町で日本髪結い床を営んでいました）から六時に家を出ていました。八時三十分のチャイムギリギリに学校へ着き、授業が終わったらクラブ活動もせずすぐに帰り、家の手伝いをするような生活でした。親がいた時のありがたさを感じさせられました。

学校では先生が、一生懸命なさい！ それだけで良いのよ！ と励まして下さいまし

た。おかげで無事卒業できました。今でもその先生方とはお交わりをさせていただいています。こんな良い学校に入れたのも私を置いて召天する時に、私の耳元で讚美し祈った母の願いに対して神様が私と共にいて下さり、常に導いて下さったからだ、今は感謝することが出来ます。

ところがそれまで養女だったことも知らず育てられたのに、急に今までの両親や兄はお互い他人だったことがわかりました。肉親が健在していること、それもおばの家と同じ町に実家があり、実祖母(母方の)と再会できて、私が生まれた時の母の証しを聞くことが出来ました。母の証しを聞かされている中で、キリストを犠牲にして下さった神の愛が理解できました。

学校時代には神様のことがなかなか信じられませんでした。しかし祖母の家に身を寄せ、教会生活、クリスマスチャン・ホームの体験をしていくうちに私も母のように生きたいと思うようになりました。母が大事にしていたものは神様を信じることだったのだとわかったのです。そして二十歳のイースターにクリスマスチャンとなることができました。

私を生んでくれた母は偉大な人だったと思います。死んで私に伝えてくれたのです。

自分だったら自分の命を亡くしてまで未熟児である子の小さな命を助けようと思えるだろうかと思いました。見たことのない母ですが、最高のクリスマスチャンだったと思っています。母は一粒の麦でした。

洗礼・十五歳のクリスマス

三浦喜代子

十五歳の真夏に、妹に勧められて初めて教会へ出かけた私は、翌週も一人で同じ道を歩いて教会の門をくぐった。

「来週もまたいらっしやいね」と、帰り際に声をかけてくださった女性の笑顔にうなずいてしまったからだ。あんな風になにこやかにていねいに美しく話しかけられたことはなかった。以後、休むことなく通い続けた。

しばらくすると牧師が声をかけてきた。「クリスマスに洗礼を受けませんか。ご両親と相談してください」

洗礼が何を意味するのか、正確な知識があったわけではない。

「入学式のようなものです。学校も入ってから勉強してわかってくるのと同じです。何も心配はありません」

牧師は初老の威厳を感じさせる穏和な紳士であった。「はい」と、私はかしこまって返事をし、早速父母に伝えた。

「自分でいいと思ったら、そうしなさい」両親は物わかりがよかった。ふだんから子どもの意志や願望を受け入れようとする親たちであった。私は牧師の申し出に従うことに決めた。

「両親は反対しませんでしたから、そうしたいと思います」

「そうですか、よかったです。ではこのクリスマスにしましょう」

受洗の日まで、いつものように礼拝に出席

する以外に特別なことは何もなかった。唯一「入学式のようなものです」だけであった。

それに対して疑問も不安もなかった。むしろなんだかわくわくしてうれしかった。だから、信仰と呼べるものはなにもなかったと思う。あるのは未知の世界への好奇心と冒険心だった。もう一つ、不純な動機があった。

私より先に日曜学校へ行っていた妹たちを追い越せることだった。姉だから洗礼も先に受けるのが当然だと非常に満足した。

私は妹たちに得意になって言った。「お姉ちゃんね、クリスマスに洗礼を受けるんだよ」

「ふーん」

まだ小学生の彼女たちはなんのことやらわからなかったようだ。

教会へ行き始めて四か月ほど過ぎたクリスマスの日、私はセーラー服に白いリボンが大きく結んで式に臨んだ。頭に振りかけられた冷水が首筋から背中伝わると、目の覚めるような鮮烈で爽快な思いが体の真ん中を走った。

「あなたは今日から神の子です。すべての罪は赦されました」

牧師の宣言はうれしかった。私は生まれ変わったのだ、今日からは清い神の子になったのだと単純に信じた。こうして今日まで五十年、時に生死の境をさまよう大病や、心の痛手に苦しむ時も、『私は永遠の愛を持ってあなたを愛した』と言われる主イエスの真実によつて支えられてきた。この人生を、神に感謝している。

一滴の水

山本披露武

一冊の本が人生を変えることがある。その一冊に出会ってしまった。三浦綾子の『塩狩峠』である。

それまでの私は、宗教は愚かで弱い人たちの願望によってつくられたものと思っていた。キリスト教徒はもちろんのこと、他の宗教に頼る人もみな、意気地のない人だと思っていた。その意気地のないはずのキリスト教徒永野信夫という人が、見知らぬ人たちの命を守るために自分の命までも投げ出してしまったのだから、私の宗教観では説明がつかなくなってしまう。

どうしてそのようなことができるのだろうか。キリスト教徒についての私の考えが間違っていたのだろうか。『聖書』を読めばそのことがわかるのだろうか。

そうだ、一度『聖書』を読んでみよう。そしてよく考えてみよう。そう思っただけで早速『聖書』と矢内原忠夫の『聖書講義』を購入し、その日から『聖書』の学びをはじめた。

が、いざ『聖書』を読んでみると奇跡に関する記事があまりにも多く、うんざりしてしまった。その上、独りで学ぶことに限界を感じるようになり、近くの教会に出席させていただくことにした。けれども、それから受洗までが長かった。毎日聖書を読み、日曜日毎に説教を聴いても、神様がおられるとの確信がどうしても与えられなかったのだ。

そのような私に、神様が今も生きて働いて

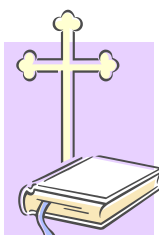
くださっているとの確信が与えられたのは、胃潰瘍で吐血をした時だった。太い針で胸を刺されたような痛みが突然起こり、続いて吐血。その痛みと苦しみに私はのた打ち回った。深夜にもかかわらず駆けつけてくれた医師が応急処置を施してくれた後、「今は動かさないほうがいいでしょう。夜が明けてから救急車に来てもらいましょう。それから、水は駄目ですよ。飲むと命がありませんからね」と言っ

て帰っていった。ところが、吐血と全身ぐしょぬれになるほどの大汗で脱水症状となり、乾ききった唇がプチプチ音を立てて割れはじめ、

その渴きに耐えられず「絶対に飲まないから」と言っただけで家内に頼み、一滴だけ、舌の上に水を落としてもらうことにした。

と、冷たい風と甘い香りが口いっぱいになり、なんともいえない安らかな気持ちになってくるのだ。一滴の水にこれほどの力があるとは……、その一滴の水を通して私は神のみわざを見た思いがして畏れを感じ、同時に、それまでどうしても信じていることができなかった「神の存在」が信じられるようになった。

痛みと苦しみから解放された私の様子を見て安心したのか、隣の部屋から子供たちの寝息が聞こえてきた。その寝息を聞きながら、私は神の守りの中にあることを強く感じ、今からはイエス様を信じて生きていこう。病気が治ったら洗礼を授けていただくとうと決心をし、静かに夜が明けのを待った。



詩篇のことばに慰められて

長谷川和子

十七歳のある日、ルーテルアワーから聖書通信講座が届いた。聖書の内容とする文章が書いてあった。分らないままであったが、問いに記入して送り続けた。学びが終わる頃「私の住んでいる近くに教会はありますか」と問い合わせると、十日町教会が紹介されてきた。いざ、教会の前に立つと、門をくぐる勇気がなく、二回もすくすくと引きかえした。三回目にはやっと玄関に立つと「よくいらっしやいました」と牧師がにこやかに迎えてくださった。

初めて教会堂に入った時、そこは別世界であった。静寂の中で頭を垂れて祈っている人々を見て足がすくんでしまった。世の中にこのような所があったとは、田舎育ちの私には想像もできない光景であった。それ以来、毎週日曜日に教会へ通うようになった。

父は善良でやさしい人であったが、お酒を口にすると豹変し、母に乱暴することは日常茶飯事であった。弟妹とともにそのような家庭に育ち、毎日が不安だった。教会で知った聖書の詩篇のことばが心のよりどころになった。

『たとえ、死の陰の谷を歩むともわざわざいを恐れません』

『私は山に向かって目をあげる。我が助けは天地を造られた主から来る』

四方を山に囲まれた地に住んでいたので、

西側の峰々を見ては、だれか、山の向こうから助け人が現れないものかと思っていた。詩篇の中に我が姿を重ね合わせて慰められた。『主は私を滅びの穴から、泥の沼から引きあげて、私の歩みを確かにされた』

教会に行つたからといって、父の酒乱が収まるわけでもなく、家庭は以前と同じであったが『苦しみにあつたことは私にはよいことです。これによつて私はあなたのおきてを学びました』との詩篇で納得し、下ばかり向いていた内気な私は少しづつ笑顔になつていった。クリスマスチャンになりた

い一心で、十九歳の復活祭に洗礼を受けた。家庭環境の影響からか虚弱體質であつた私は、今日までに、開腹手術三回、体の各箇所の手術十四回、交通事故三回と、苦難の日々が続いた。

子育てが終わると、有料老人ホームで相談員として勤務するようになった。激務の中で、高血圧症、過呼吸を発症、帯状疱疹の時は菓害に遭い、顔が赤く腫れて人相まで変わり、全身水泡のために痛みとかゆみで一晩中入院のベッドの上で塗り薬を握りしめたことがあつた。

先年、腰椎がずれて歩行困難になつた時も、転倒して右上腕部を骨折し、四センチのボルトを十二本入れる手術をした時も、みことばに励まされ、希望を持つことができた。

『神は耐えられないような苦しみは与えない。逃れる道も備えてくださる』



確固とした真の教師

土筆文香

わたしは、仏壇と神棚のある家で育ちました。祖母は毎日仏壇に手を合わせており、父は、毎月一日になると神棚を掃除し水を上げ、拜んでいました。

臆病な性格だったので、人前で何かをするときや、困ったときは「神様、仏様！」と心の中でいつも唱えていました。でも中学生のころ、仏様は死んだ人になるらしいけれど、神様はどういうものなんだろう？ と疑問を抱きました。神棚の中をのぞくと、紙が置いてあるだけでした。こんなものに頼れない。信じられる確かなもの、守ってくれるものがほしいと思いました。

中学生のとき、友達がひとりもいなかった時期がありました。わたしはサエちゃんという架空の友人を作つて、心の隙間を埋めようとしていました。サエちゃんを神様のように思い、困ったときは「サエちゃん助けて」と叫んでいました。でも、本当に大変なとき、サエちゃんは助けてくれませんでした。また、劣等感に押しつぶされそうになつてもいました。自分の存在価値がわからず、生きている意味が解らず、毎日死にたいと思つていました。

高校に入ると自信がつき、劣等感を克服したと自分で思っていました。でもそれは、優越感に変わっただけにすぎず、とても高慢になつていました。高校卒業後は、保育科のミッシェンスクールに入学しました。そこで初

めて聖書を手にし、一度だけ教会の礼拝にも出席しました。

幼稚園に勤めると、学校で学んだことがちつとも役に立たず、こんなはずじゃないと思ふことばかり起こりました。

悩みの中にあつたとき、ふと立ち寄つた本屋で三浦綾子の「あさつての風」を買いました。そのときは三浦綾子がクリスマスチャン作家であることを知りませんでした。本の内容にうなずくことが多く、三浦綾子の本をもつと読んでみたいと思ひました。次に小説の「積み木の箱」を読んだとき、ハンマーで頭を殴られた気持ちになりました。教師である主人公の悠二は、正しいと思つて一郎を指導してきました。でも、それは一郎の心を傷つけるものでした。「真に自分を支えるものが、自分自身のなかにはひとつもないことに気づいた。(略)この弱い自分を導いてくれる確固とした真の教師が欲しい。初めて悠二はそう思つた」とあるのを読んで、共感しました。

いままで、自分はいつとも正しいと思つていました。自分が教えることがあつても、ほかの人に教えられることはないが高慢になつていました。でも、自分が間違つていたのでと気づかされました。このままではいけない。教会にいかなくては……という思いがつのり、近くの教会へ行きました。そこで真に自分を支えてくれるお方、確固とした真の教師、イエス・キリストと出会つたのです。

教会へ通い始めてから半年、クリスマス礼拝の日に洗礼を受けました。二十二歳のときでした。

ある夏の日

榎 尚子

中学二年の夏休みのことだった。いつもは忙しい日々だったが、夏休みの間は朝ごとに家庭礼拝をしていた。

そのころはまだ会堂はなく、家の教会だったが、少しずつ教会の形ができていった。中学生になったわたしは、外では大人しくても家では生意気ざかりだった。キリスト教のこと、教会のこと、何でもよく知っていると思いがついていた。もちろん「思いがついている」と気がついたのは大人になってからである。

実際、赤ちゃんの頃から教会に連なっておれば、知識においては最近教会に来たばかりの大人の人よりはるかによく知っていた。教会学校の先生の話も、半分聞けば後全部が分かったような気になり、また本好きだったので随分と頭でっかちだった。

その日、いつものように親子二人で礼拝し、父が聖書を読んだ。その時、母が「ほんとに、わたしたちの罪のために、イエス様は十字架にかかってくださったのねえ」とポツンと言った。

その時、わたしは今まで聞いたこともないことばを聞いたかのようにハッとされた。わたしの罪—そう思ったとたん、今まで自分がどんなにイエス様に対して思いがついていたかということに気がついたのである。イエス様、ごめんなさい、わたしは間違っていました、これからはイエス様の弟子になります、と涙

を流して祈った。

親に褒められるいい子であるのがよいと思っていたが、信仰とは神様を信じることでいい子でいることではないと、気づかされたのである。

高校二年生のクリスマスに受洗、我が家となりて建った小さな会堂の初めての受洗者という恵みをいただいた。

その年の夏、わたしは初めて自分の教会以外のクリスチャンの世界を知った。それはKK S(教会高校青年会)という日本基督教団の夏期学校だった。

山中湖で開かれたその会に、ひとりで参加した。全国から集まった教会に通う高校生達、小さな教会に席を置く者には圧倒される思いだった。

懐かしい思い出である。救いの恵みを教えられる者から伝える者へ、人生の様々な経験を経て神様はなおも私に課題を与えてくださっている。どんなに年を重ねても、あの夏の日のご感動は私の原点である。「主よ終わるまで仕えさせてください」が日々の祈りである。



神は愛なり

富岡国広

私が神を信じ洗礼を受けたのは三十歳を過ぎてからであった。それから十年、二十年と経過していくのだが、生ける神のことについていっこうに目が開かれず、幼い知識のままの状態が長く続いた。

受洗した当時の私の信仰は、当然ながら信仰などと呼べるような代物ではなかった。単的に言うならば、唯一の神を信じている自分が何か上等な人間になったような気分があり、心に張合いができたといった感じさえあった。この神のためなら何でもできる、そんな熱い思いが私の心に充満していた。それら全てが一時的な喜びに過ぎないことに気づくこともなかった。

重い病に見舞われたり、軽い試みに会っただけで「なぜ、自分がこんな苦しい目に」と不満を募らせ、祈ることさえできなくなる始末であった。

聖書には「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」と書かれている。にもかかわらず、クリスチャンでない者を冷たく切り捨てて自分を正当化していた。クリスチャンでない者は唯一の生ける神を拒み、滅びを招いていると思っていた。

もし、戒めを破っただけで神の審きを受けるとすれば、私などはどうの昔に滅んでいただろう。

「信仰の父」と言われるアブラハムは、私たちと同じような身勝手さ、弱さを持ち合わせ

ていて、妻であるサラを二度も危険な目に会わせたのである。それは神のご計画の妨げとなり、また悲しませることにもなったはずだ。しかし、そのようなアブラハム(また私)を、神は親しく「友」と呼んでくださるのである。そうした生ける神の驚くべき寛容も、恵みの豊かさも、真に悟ることがなかったのは、すべて己の力に頼るといふ誤ちに陥っていたことによるのだ。

「百聞は一見に如かず」と言われる。百回もくり返し聞かされるより、一度目にした時の感動は生涯忘れられない記憶として心に残る経験は誰にもあるだろう。キリスト者が常に耳にするのが「十字架のことば」である。

やがて、時至り心の眼が開かれ、自己中心という罪に汚れた私こそ即刻死ぬべき人間であることを示された。そのような者のためキリストが代って十字架上で死んで下さった。苦しんだ後、その余りにも大きな愛に触れた時心に刻まれる、それが「心の割礼」、つまり忘れることのできないしに違いない。

それは人が「神のかたち」に創造されて以来、つまりアダムとエバが罪を冒し墮落してから、私たちが存在する最も新しいこの世にあつても、依然として変わることのない神である主の真実である。

ペテロの手紙一章二十四、二十五節の「人はみな草のようで、その栄えは草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない」とのみことばに今こそ私の心は喜び、涙をもって内なる魂が証言する。「神は愛なり!」と。

贖われた人生

遠藤幸治

私は五十四年前の三月、妻と結ばれるために十字架の前に立った。結婚式に歌っていた「聖なる聖なる聖なるかな」讃美歌六番が礼拝堂に厳かに響くなか、私は涙が止まらず殆ど泣いていた。司式をしてくださった牧師先生も声を詰まらせておられた。何故あんなに涙が止まらなかったのか、友人に「よほど嬉しかったのだろう」と言われたが、それほど嬉しなかったのだ。結婚式の主人公はイエス・キリストであると信じていた。



活力も乏しく、牧師先生も東京に

いる親戚も心配するのは無理もない。こんな私達を神様は捉え、何をなさうとしておられるのか、神の御手にお委ねするほかなかった。

披露宴に歌っていたいただいた讃美歌「わがゆくみちいついかに」四九四番を讃美される中、新しいスタートを切った。結婚して今日まで何があったのか、大雑把に記してみよう。

家庭が与えられて三年が経った四月、二人の幼い子を連れて公園に出かけたときだった。類焼によって、すべてを焼失してしまつた。四所帯が焼け出され、新聞にも大きく掲載された。教会の皆様をはじめ、多くの皆様に助けていただいたことは、私たち夫婦にとつて

は決して忘れることはできない。

それから三年後、今度は尿毒症になり、担当医師は、牧師先生、近くに住む弟、そして妻を呼び「親類を呼ぶように」と言われたことも知らず、これも神様に備えられた「通るべき道」と信じ、苦しみに耐えていた。教会の皆様が一度に十八人もの方が病院に駆けつけてくださり、祈りと涙に暮れた当時を思うと今でも胸が熱くなる。今から四八年前は日本に透析医療はなかったのか、医師の口から透析という言葉は聞かれなかった。

三か月近く入院した後、明日退院するという前の晩、病院の屋上で祈っていた時、私は天の声に畏れ、ひれ伏し涙が止まなかった。

『お前に代わってわたしが死ぬ、汝の罪赦されたり、お前は行ってこの福音を伝えよ』あの時の衝撃は私の信仰の基礎である。

以後、方々の病院を転々とした挙句、六十歳になって透析導入となり、二十年が経った。不思議と生かされ、この四月、模範患者として表彰され恐縮している。また、神様のご褒美なのでしようか。昨年十月、ひ孫が生まれ、何だか天使が舞い降りてきたようで可愛くてたまらない。

こうした背後には、主イエスの十字架の贖いがあったこと、また教会の皆様のお祈りと八十歳になった妻の苦勞を思わずには得られない。妻は、私が透析に行くときは必ず祈ってくれたし、今も続いている。

イエス・キリストは、私たちの人生に伴ってくださり、涙を拭いて下さった。主の御名はほむべきかな。

わりだった。ところが、東京で、仕事と勉強に打ち込んでいた十八歳の五月、友人に誘われて聖徒教会の礼拝に出掛けるようになった。三か月ほどした八月に、教会の修養会が軽井沢聖書学院を会場に行われた。三日間であった。私は今度も誘われるままに参加した。早朝から夜まで、ぎっしりとプログラムが組まれ、毎回、信徒たちの証しや吉田隆吉牧師の力強いメッセージが続いた。

私は証しに引き込まれた。特にその中の一人の方の証しが私の心を激しくつかんだのである。キリストによつて人生が変えられ、愛と奉仕に生きる姿に震えるほどの感動を受けた。こんな経験は生まれて初めてであった。

八月八日、最後の夜のことであった。牧師が洗礼の呼びかけをした。私は迷わず即座に決断をして、その場で洗礼を受けた。この日こそ、その後の私の人生を大きく変えるスタートになった。昭和三八年のことである。

受洗した翌年には、私は献身者として教会の宿舎に入り、奉仕するようになった。それが十数年続いた。その後結婚して感謝な日々を送っているが、神様は私に一つの大きなビジョンを与えられた。それは郷里に伝道することであった。想像を超えた数々の道が開かれて教会堂が与えられ、私は主の召しに従って数年間の学びを経て、六十歳を過ぎて牧師になった。

今、私は筑波山を見上げながら、日々伝道に励んでいる。

『神にとつて不可能なことは一つもありません』。主の御名はほむべきかな！

最後のひとひらまでも

西山純子

青年のように端正で、すっかり色白な美男子になられた池田勇人先生は、神さまの愛に包まれた清々しささえ感じられる輝きの中で、ホスピス病棟に居て下さった。

皆で写真を撮ろうと起き上がられて、今にもベッドから出られそうなエネルギーが見られた。夫人との想い出と言われる讚美歌を一緒に歌った。一人ひとりに笑顔で頷かれた。握手もしていただいた。

後に夫人から天国を間近に感じられてから、先生は気がかりなことを極力遣り残さないよう心されたと同った。あの人にお礼を、こちらにはお詫びを、もう一方には愛いっぱいの慰めを：先生は神のご計画を信じ、どんなにか、一日一日、一刻一刻を大切に主のために、地上で出会った一人ひとりのために惜しみなく与え尽くされたことが。



うららに照る日影に 百千の花ほおえむ
人知らぬ里に生うる 四葉のクローバ
三つの葉は希望 信仰 愛情のしるし
残る一葉は幸 求めよ 疾くその葉
希望深く信仰かたく 愛情厚くあれ
やがて汝も 摘みて取らん
四葉のクローバ

この歌は日本クリスチャン・ペンクラブ理事長時代、池田勇人先生から、正確な詩を教えてくださいました。作曲者はアメリカのピアニ

ストだったR・E・ロイテルで、明治の終わりに三年間東京音楽学校教授として来日しており、その頃の作と言われているとのことだった。

先生を想うたびに、この歌が蘇る。

今身近におぼえさせていたでいる。地上を去られても尚、先生は私たちを育てて下さっていることを、神さまに感謝する。

涙をぬぐって、今までの多くの恵みを思い起こし、真摯にあかしの文章を紡がせていただきたいと願う。

先生は優しく温かい方だった。時にイエスさまのように苦しみの中で、必死に神さまの配慮あるご計画を示し続けられた勇敢なお姿に、励ましをいただいた。

先生の祈りを、しっかりと抱いて歩み続けた。先生と出会われた全ての方々と共にまた、お会いする日まで。

編集後記

★今回はJCP『あかし文章』の原点に立ち返って、それぞれの人生の原点である【救いの証し】を特集しました。神様のご計画によるさまざまな霊的出生の恵みが揃いました。

JCPの歴史の原点に村岡花子がいたことは周知のことですが、今回は、はからずも世の中の風に吹かれて登場してくれました。このタイミングに、主のお導きを強く感じます。花子のことは今後も折にふれて学びつづけ、書く事への火種にしたいと願います。

(K・M)